

第87回 みんなで作る音楽会 案内

日時：5月14日 水曜日 13:15 から 16:30

場所：公民館 114 室

参加者：清水、久我、高濱、徳島、下中、塩路夫妻、山川恵子、滝崎、岡田、筑摩、天王寺谷、榎本、稲垣、松山、光長、三村、山口弘子、安居院（記）計19名

パガニーニ特集

天才パガニーニの映画を見ました。デイビット・ギャレットのバイオリンは、これまで聴いた事のあるものと全く違って、目から鱗が落ちる演奏。美しい一言に尽きる。

また、清純なシャーロットの歌声もよかった。

そして、デイビット・ギャレットの色気はすごい。映画の世界に酔い痴れました。

そして、服部百音の超絶技巧を駆使した演奏やピアノとヴァイオリンの聴き比べ。

最後には、意外にもギターの名手でもあったパガニーニの曲を聞いてみました。

1. 映画「パガニーニ 愛と狂気のヴァイオリニスト」 2013年 独 13:15-15:15

19世紀イタリアの天才バイオリニスト、ニコロ・パガニーニのスキャンダラスな人生を、「不滅の恋 ベートーヴェン」のバーナード・ローズ監督が映画化。

1830年、イタリア。

敏腕マネージャー、ウルバーニの働きで富と名声を手にしたパガニーニは、私生活では女や酒、ギャンブルにまみれた墮落した毎日を送っていた。

ある日、指揮者ワトソンの尽力でロンドン公演を行うことになったパガニーニは、そこでワトソンの娘シャーロットと出会う。美しい声を持つシャーロットと音楽を通して心をかよわせ、初めて本当の恋を知るパガニーニだったが……。

欧米を中心に絶大な人気を誇るドイツ人バイオリニスト、デイビット・ギャレットが主人公パガニーニ役でスクリーンデビューを飾り、名器ストラディバリウスで名曲の数々を奏でた。



インタビュー記事から；ギャレットは劇中でパガニーニとしてその腕前を披露。「幼い頃からパガニーニの音楽を聞いていて、バイオリンを弾く人間だったら誰でも彼の曲を弾きた

いと思うもの」と天才音楽家への思いを語り、それゆえ「それぞれのシーンに合った編曲ができた。また、パガニーニの人生に共感できたので、楽に演じられた」と撮影を振り返った。

5 億円と言われる名器ストラディバリウスの弾き心地を問われると、「これまでたくさんのバイオリンを弾いてきて、金額にかかわらず良い楽器もあるが、ストラディバリウスはものすごく音が通るのが一番の違い」と説明した。

感想：

この映画の縦線は、シャーロットの存在だ。継母で複雑な家庭だが、彼女の凛とした一貫した態度に感銘を受けた。ドロドロした内容に清涼剤が吹き込まれたように輝いている。

彼女は容姿も態度も素晴らしいが、何より歌唱力にびっくりした。

また彼女が歌う歌詞が素敵だった。この映画にぴったりの内容であった。

パガニーニも私生活の乱れは仕方がないとしても、最後まで息子を大事にしたのには感動した。それにしても気になったのは、何かを吸引していたが麻薬であろうか。お酒や麻薬でウルバーニに操られてしまう姿が哀れであったが、ギャンブル好きな性格によって、彼に頼るほかに、まともな生活ができなかったのだ。

さすがに敏腕マネージャーで、仕事に引っ張り出す知恵に優れていた。しっかりと演奏をさせる場所を提供し、ギャンブルや女に溺れるパガニーニを引っ張ってゆく姿には鬼気迫るものがあつた。でも、世間の智慧も備えていて、シャーロットを守る行動もするのだ。

当時の風景も忠実に再現されていて、コベントガーデン界隈の様子や馬車が行きかう街路など、興味深く鑑賞できた。

でも、馬車と船の旅は過酷なものであつたと思う。よくぞ、ロンドンまで行ったことであると感心する。でも、シャーロットもアメリカでリサイタルを開いたとのことで、彼女もまた大変な旅をしていたのだ。

そこここに、超絶技巧のヴァイオリン演奏がちりばめられていて、楽しい映画であつた。

2. 休憩

15:15-15:30

次回は、6月11日水曜日 13:15- @114 室

内容は未定

3. 題名のない音楽会「3曲でクラシックがわかる音楽会—パガニーニ編」

15:30-15:55

パガニーニは「悪魔に魂を売って超絶技巧を身につけた」と言われるほど、超絶難しいテクニックを駆使しなければ演奏できないヴァイオリン曲を残した。

いかに難しいテクニックなのかが分かる3曲を、若手ヴァイオリニスト・服部百音さんが

選曲し演奏。

楽曲；

- ・無窮動ハ長調 作曲：N.パガニーニ
ヴァイオリン：服部百音 ピアノ：三又瑛子
- ・ヴェニスの謝肉祭 同上
- ・『ロッシーニのタンクレディ』から
序奏と変奏曲「イ・パルピティ」イ長調 同上



感想；

この写真に写っているのが、パガニーニの姿。映画と違って、背が高くはなかったのだ。

また、見た目も映画ほどには色気を感じない。

実際は、こんなものであったのであろう。映画は“もりすぎ”感が強い。

服部百音の説明で、演奏の難しさを知ったうえで鑑賞できたが、凄いことが起きていると
感じることができた。

難しいのにリズムを崩さず、しんどいのにそれを見せない、軽々と弾きこなす服部百音は
まさに、すごい一言。

演奏後に、鎖骨のあたりが赤くなっていて、とても痛々しかった。

難曲とは言えども、美しい曲であった。

4. らららクラシック ♪ 「ラフマニノフの“パガニーニの主題による狂詩曲”」

15:55-16:20

祖国へ届けこころの音楽

名曲に込めたラフマニノフの思いを3つのキーワードで読み解く。

1. 先人を超える名アイデア！
2. よみがえった音楽の泉
3. 隠れ悪魔を探せ！

おそらく誰もが、CMや映画で一度は耳にしたことがある有名なメロディー。

曲名にもある通り天才バイオリニスト、パガニーニが作ったメロディーが基になっている。
歴代の偉大な作曲家たちも挑んだ有名なメロディーに、ラフマニノフはなぜあえて挑んだ
のか。

名曲誕生の裏側に隠されたある驚きのアイデアと祖国ロシアへの望郷のおもいを見つめる。

・【ゲスト】 ロバート・キャンベル（日本文学研究者）

▽「パガニーニの主題による狂詩曲」（ラフマニノフ）ピアノ・上原彩子／管弦楽・東京フ
ィルハーモニー交響楽団／指揮・田中祐子

感想；

パガニーニには、いろんな作曲家がインスパイアされて作曲をしている。リストは「ラ・カンパネラ 鐘」をブラームスも、そしてこれはラフマニノフの曲である。

誰もが知っている第 18 変奏だけではなく、全体で素晴らしい曲に仕上がっているのだ。

そこに、悪魔との争いを入れ込んでいるという美濃さんの説明は面白かった。レクイエムの怒りの日のテーマを使っているとのこと。

やはり、単純に美しいだけではなかったのだ。理解が深まった。

5. 題名のない音楽会「弦を奏でる音楽家たち」

16:20-16:30

ギタリストの村治佳織さんと、村治奏一さん姉弟をお迎えし、ギターとヴァイオリンを徹底比較！

ギタリストもヴァイオリニストも左右の手の長さが違う！？

ヴァイオリンのあの名作曲家はギターの達人だった！？

目からウロコのトークを展開しました。

♪4:「ヴァイオリンとギターのためのカンタービレ」

作曲： N. パガニーニ

ヴァイオリン： 五嶋龍

ギター： 村治奏一

今日の格言

『ギターはいつも旅の友』 ～N. パガニーニ～



感想：

最後に、ギターの曲を聞いた。 ギターのテクニックをヴァイオリンに持ち込んだのは、パガニーニであった。

豊かなヴァイオリンの響きと、ギターのきらめきとが織りなす楽曲は、初めて聞いても素晴らしい実感ができた。

久しぶりに、五嶋龍の演奏を聞いた。

この番組は、2016 年の放送で、彼が司会をしていた題名のない音楽会のものである。

写真にあるように、このスタジオの背景には壁面に、laundry boat（洗濯船）と書いてある。当時五嶋龍はアメリカに滞在しており、英語表記になっているがアート好きにはすぐにピンときた。これはパリのモンマルトルにあった洗濯船（フランス語では、バトー・ラヴォワール）を模したものである。すなわち、ピカソのアトリエがありアーティストたちのたまり場になっていたところである。ここからキュビズムが生まれた。

それにあやかって、アーティストたちのたまり場をスタジオに再現したのだろう。

以上